

グリーンツーリズムの魅力

京都府立大学 名誉教授

みやざき
宮崎たけし
猛

写真1 峠から見た元陽の棚田の大景観

① 元陽の棚田農村の観光資源

グリーンツーリズムとは、農村の自然や文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動であり、日本では1992年から農林水産省の政策として推薦されてきた。今世紀に入り韓国や中国、東南アジアの農村でも、同様の動きが広がっている。

中国雲南省の元陽県とその周辺の棚田は（写真1）、面積と標高差において世界最大規模であり、近年世界農業遺

産と世界文化遺産に登録された。グリーンツーリズムの魅力を紹介し、里山と水田農業とのかかわり、自然との共生とグリーンツーリズムについて語るには、元陽の棚田は最適な事例である。

元陽県の人口38万人の大半は、ハニ族やイ族などの少数民族の農民である。この地域を訪問する観光客（ビジター）にとって、魅力となる観光資源は、雄大な棚田の景観と同時に、多様な少数民族の文化（衣装、農家民家、音楽、踊り、民具など）であり、その中で体験



写真2 ハニ族の踊り



写真3 観光客も踊りに参加

学習する多様な農業・農村体験である。

写真2はハニ族の箐口村^{ちんこう}での青年たちの民族踊りであり、その終盤には観光客も踊りの輪の中に入り、ともに楽しむことができる(写真3)。

男性が長期の出稼ぎに出ているイ族の小水井村では、女性たちの民族踊りがみられる。民族ごとに、村ごとに踊りの内容や衣装、音楽が違ってくる。

日本の農家民宿や農家レストランに相当する農家楽^{らく}では、後述する棚田農業で生産された食材を使った料理を食べ、村の中の農家で宿泊することもで

きる。イ族の農民が経営する農家楽では、棚田の魚(コイ、フナ、ナマズ、草魚など)料理を注文すると、隣の棚田で魚を捕獲してから料理するので、待ち時間は1~2時間となる。しかし、料理の味は新鮮で、絶品である。

② 棚田はなぜ維持されているか

雄大な棚田の景観と少数民族の生活文化とに感動したビジターは、観光資源の背後にあり、目に見えない農村の人々の価値観や生き方を体験学習しようと、リピーター(交流者)となり、何度も同じ農村を訪れる。筆者も調査研究という大義名分はあったが、5年間で10回以上も同じ農村を訪問したのは、かつての日本の農村を彷彿とさせる少数民族の農民たちの価値観や生き方に触れたかったからである。

元陽県^{あいろう}は哀牢山脈南端の高い山々と深い谷々からなる山間地であり、最低標高は144.0m、最高は2,939.6mと谷底から峰上まで順に、熱帯、亜熱帯、温帯^{こう}の気候となる。標高150m前後の紅河畔^がにある南沙^{なんさ}(県庁所在地)は、乾期の長い熱帯モンスーン気候であり、年平均気温24.8℃、年間降雨量762mmである(ちなみに東京では年平均気温は15.4℃、年間降雨量は1,528.8mm)。標高が上るにつれて雲霧や降雨の日数が多くなり、乾期は短くなる。標高1,800m以上では乾期が不明瞭となり、雲霧や降雨の多い温帯(地元では常春)の気候である。標高1,700m前後の新街^{しんがい}(前の県庁所在地)の年平均気温は16.4℃、年間降雨量は1,421.4mmである。

棚田を耕作する農民たちの集落は、標高 1,600 ~ 2,000m の幹線道路沿いの温帯に立地し、集落より上は森林（日本の里山に相当）、下には棚田が展開している。標高差に対応した地域内の水の自然循環があり、豊富な自然水の利用が広大な棚田の維持に貢献している。熱帯の強い日射により紅河および藤条河^{こうがとう} 河^{じょうがわ} 一帯で発生する大量の水蒸気が、山を登るにつれ冷やされて、集落の立地する標高以上の森林で霧や雨となり地上に降りそそぐ。雨水の大半は、標高 2,000 m 以上でよく保全された[†]森林の地下に浸透する。地下水は集落の周囲で多数の湧き水となり、一年を通じて生活用水や農業用水に利用され、河川（溪流）に注ぐ。雨水の一部は、県内 6 千余りの農業用水路を通じて棚田や河川に流れる。このような水の地域内循環を長年にわたり担保してきたのが少数民族による森林保全であり、山の斜面に沿って上から森林—集落—棚田の大景観がつけられている。

棚田では 1 年中水が貯えられ、魚も自然状態で生息している。稲作はすべて手作業と水牛の補助により行われており、小面積の農地に多くの労力を投入する有機農業で、自給自足に近い暮らしである。それゆえ、森林—集落—棚田における住民や家畜の食料・飼料の収穫、人糞尿や家畜糞尿の堆肥化、沖肥法による肥料の施用といった有機物の地域内循環が、今日まで持続している。沖肥法とは、山の斜面における森林—集落—棚田の標高差と重力を活

用して、集落から出る家畜糞尿と人糞尿を液肥とし、地域の灌漑システムを通して棚田に行きわたらせる流し込み方式による肥料の施用方法である。

③ 棚田の崩壊と若者の出稼ぎ

^{げんよう}元陽の棚田農村でも中国の経済成長は、若者を中心とした出稼ぎの急増と観光客の増加をもたらしている。このうち出稼ぎの急増は、労働力不足=耕作放棄による棚田の崩壊を引き起こしている。棚田農村では農業以外の産業に乏しく、若者の就業機会は極めて限られている。山間へき地にある棚田農村では、都市への出稼ぎはどうしても長期化し、農作業の担い手は女性や老人となり、棚田の耕作放棄や手抜き作業が増加している。これにより、少しの雨でも崩壊する棚田が増加しており、何回か訪問した際に数十枚の棚田が崩壊した見苦しい現場を見たこともあった。

^{げんよう}元陽県内の農村はすべて集居形態の村であり、その中で唯一ハニ族は田棚^{††}文化を今日でも続けている。写真 1 の棚田の中に、ところどころ出小屋を確認できるが、稲作の栽培期間である田植から稲刈りまでの約半年間にわたり、家族のうち農業労働力となる青壮年は出小屋で生活する習慣である。年間に投入する稲作労働時間は 1 アール (100㎡) あたり 40 時間以上となり、大半の作業が機械化された今日の日本の稲作労働時間の 20 倍以上である。このような状況下での若者の出稼ぎ急増が、棚田の崩壊を拡大している。

† ハニ族などの少数民族には、聖山崇拜、聖樹崇拜の伝統的規範があり、集落の上にある森林での樹木の伐採を禁止し、村（民族）の神事を司る場としての森林を保護する活動が今日まで続いている

†† 中国では棚は小屋のこと。ちなみに日本で言う棚田は、中国では梯田となる

若者の出稼ぎ抑制策として、^{ちんこう}景
区管理委員会の観光振興策がある。^{ちん}箐
^{こう}口村では、入口で観光客から入村料を
とり、村の広場で写真2や3のような
若者の民族踊りを公演する（料金は別
途）。これらの観光収入から、若者が大
半を占める民族踊りの村民25人に月給
が支払われる。民族踊りに参加する若
者は、全員出稼ぎから戻ってきて、定
住しており、棚田の農作業にも参加し
ている。村のコミュニティとして観光
を振興し、ビジネスを行うことにより、
若者の地元雇用を創出して、棚田の景
観保全にも貢献している。

以上、中国の棚田農村の観光資源と、
その成り立ち、観光資源に迫る危機に
ついて紹介してきた。このようにグ
リーンツーリズムの魅力とは、各地で
みられる個性豊かな農村そのもので
あり、あるがままの住民の生活、農林漁
業、景観と自然である。一般に観光客
は、非日常を求めて旅行するといわれ
ている。しかし、日本の都市生活者に
とってあるがままの農村は、今や非日
常の世界になってしまったのではない
のか。観光資源としてのあるがままの
農村は、そのままでは観光客に満足す
る感動を十分に与えることはできない。
観光資源を地元の魅力に昇華し、観光
客にもう一度来てみたいと思わせるの
は、地元の人々である。中国の棚田農
村でいえば^{ちんこう}箐口区管理委員会であり、
民族踊りの若者たちであり、農家^{いん}楽
の料理人たちである。

日本のグリーンツーリズムにおいて

も、地元の人々の果たす役割は大きい。
次に、日本の農家民泊のお母さんたち
がグリーンツーリズムの主役となり、
青少年の宿泊体験旅行を受け入れている
事例を紹介する。

④ 日本子ども農山漁村交流プロジェクト

今日の日本では、文部科学省、総務
省、農林水産省、環境省の4省連携に
より、子ども農山漁村交流プロジェク
ト（以下、子プロ）が実施されている。
農山漁村における青少年の農林漁業体
験・宿泊体験の事業を、4省が一体と
なって推進するためである。子プロに
取り組む農村組織の中には、一般社団
法人や株式会社の法人化を図り、旅行
業法上の第3種の旅行会社の資格をと
り、着地型観光⁺の担い手になるケー
スが増加している。従来の旅行商品は、
第1種や第2種の資金力のある旅行会
社、しかも観光客の出発地である発地
型⁺の会社により企画・募集・受注され
てきた。この方式では、グリーンツー
リズムやエコツーリズムなどの小規模
で地域内に分散した体験学習型のツー
リズムは、商品として扱にくい弱点が
あった。これに対して着地型観光は、
観光客の到着地である農村側がつくる
旅行商品であり、地域内の観光資源の
活用、ガイドやインストラクターの地
元手配、なによりも多数の農家民泊や
農家民宿との企画・調整・実行に力を
発揮できる。

子プロの事業が拡大してきた背景に
は、農林漁業体験や宿泊体験の中でも、

⁺観光客の到着地（観光地）を着地、その出発地（市場）を発地と表現して、いずれの地域の関係者が主導して旅行商品をつくり、販売し、実行していくのかによって、観光事業を着地型観光と発地型観光とに分類する考え方である

農家民泊や農家民宿での宿泊・食体験の高い教育効果が確認され、学校側の希望が広がっていること、国や地方自治体による農家民泊や農家民宿に関する

子プロでは、農家民泊にしる農家民宿にしる、子どもたちと受入農家の家族とが、一緒に食事をつくり、一緒にご飯を食べて、宿泊する宿泊・食体験

表 1 農山漁村での長期宿泊体験による教育効果の評価結果 (2008 年度)

項目	調査対象178校の回答割合 (%)				
	非常に よく感じる	よく 感じる	どちらとも いえない	あまり 感じない	全く 感じない
児童が互いに励まし合うなど、連帯感や仲間意識が向上した	26	63	10	1	0
班、学級、委員会等の集団で活動する際、リーダーシップを採る児童が増えた	13	64	22	1	0
勉強や運動が不得意な児童を助けるなど、優しさや思いやりの気持ちが深まった	9	63	27	1	0
きちんとあいさつができる児童が増加した	18	61	20	1	0
児童が農業体験等を行ったことで、食の大切さが理解された	16	54	27	3	0
いじめ問題や不登校問題の改善に効果が見られた	7	40	50	3	0

出典：参考資料4)の「文部科学省の取組について」

る規制緩和が進んできたことなどがあげられる。表1のとおり文部科学省が2008年度に実施した農山漁村での長期宿泊体験による教育効果の評価結果によれば、「互いに励まし合うなど連帯感や仲間意識が向上した」、「リーダーシップを採る児童が増えた」、「優しさや思いやりの気持ちが深まった」、「きちんとあいさつのできる児童が増加した」、「食の大切さが理解された」など、多くの設問において子どもたちへの教育効果が確認でき、宿泊・食体験による多様な効果が期待できる。また、宿泊・食体験との関連があまり意識されていない「いじめ問題や不登校問題の改善」の効果も、確認されている。

が原則になっている。観光客を対象にした農家民宿では、民宿の方で食事をつくり、観光客は食べて寝るだけである。この点が、体験学習型の子プロと観光との違いである。体験学習型旅行の教育効果などが注目されて、子プロに限定する形で地方自治体による農家民泊への規制緩和が進んできた。民泊農家の心がけは、子どもたちを家族の一員として迎えることと、あるがままの本物の体験である。これにより宿泊・食体験のお別れ会では、子どもたちと民泊農家の家族とが涙を流しながら別れを惜しむ光景が、たびたびあるといわれている。

滋賀県日野町の三方よし！近江日野

†日本へのインバウンドとは、訪日外国人による観光のことである。訪日外国人観光客の2020年の政府目標は、4,000万人である。これを実現するためにさまざまな政策が実施されている(観光立国実現に向けたアクション・プログラム2015)。農林水産省はインバウンドグリーン・ツーリズムに、文部科学省は訪日教育旅行の受入拡大にそれぞれ取り組んでいる

表2 三方よし！近江日野田舎体験推進協議会のモデルプラン

日程	午前	午後
1日目	現地まで移動	入村式、農村生活体験と夕飯づくり、一日の記録
2日目	田植え体験	農村の散策としくみ、農村生活体験と夕飯づくり、一日の記録
3日目	里山保全活動	竹細工づくり、農村生活体験、家族への手紙学習と一日の記録
4日目	家族への手紙の投函、 写生大会	交流会の準備、民泊でお世話になった家庭への手紙学習、交流会、 一日の記録
5日目	離村式	学校まで移動

出典：近畿子ども農山漁村交流プロジェクト推進協議会「受入モデル地域ガイドブック」(2010)

田舎体験推進協議会は、農家民泊150軒、公的宿泊施設6軒などと町内のグリーンツーリズム関係団体とをメンバーにして、2009年から子プロに取り組んでいる(表2)。「三方よし」とは、近江日野商人の買い手よし、売り手よし、世間よしの精神だが、これを子プロに応用して、子どもたちには本物体験を通じた感動を体感してもらい、民泊農家などには訪問した子どもたちから元気や生きがいをもらい、地域には自信と誇りの回復や地産地消の経済効果をもたらすことを目標にしている。そのために宿泊・食体験では、子どもたちと民泊農家の家族とが同じ作業をし、同じ釜の飯を食べることで、互いに理解し合い、共感し合い、交流することを基本にしている。また、民泊1軒あたりの受入人数は3～4名にしている。5名以上になると、子どもたちだけで集団をつくり、民泊農家の家族との交流が二の次になるからである。

子どもたちが民泊内で体験するプログラムは、畑の草むしり、竹馬づくり、牛の餌やり、野菜の箱詰めといった民泊農家自らが企画・準備・実行する「家業おまかせプログラム」を原則にしている。三方よし！近江日野田舎体験推進協議会は、2015年に一般社団法人となり、日野町における着地型観光の推進役として子プロのみならず、インバウンド[†]の外国人青少年の民泊受入にも力を入れている。

以上、中国雲南省元陽^{げんよう}県の棚田農村と、日本の子ども農山漁村交流プロジェクトとを事例にして、グリーンツーリズムの魅力を紹介してきた。そこに共通する特徴は、あるがままの農村そのものである美しい景観、伝統的な文化、豊かな自然と地元の人々が観光資源になっていることであり、体験を通じた交流が観光客および地元の人々双方に、物心両面でさまざまな効果をもたらしていることである。

参考文献

- 1) 宮崎猛編著：農村コミュニティビジネスとグリーン・ツーリズム、昭和堂(2011)
- 2) 宮崎猛編著：日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズム、昭和堂(2006)
- 3) 近畿子ども農山漁村交流プロジェクト推進協議会：子ども農山漁村交流プロジェクトリレーションプログラムin近畿報告書(2011)
- 4) 農林水産省農村振興局都市農村交流課：子ども農山漁村交流プロジェクトについて(2016)